

春の新しい楽しみ

清水 隆子

ガラス戸に目を向けた娘が「あーっ」と声をあげた。もしやと思い急いで駆け寄ると、やはりそうだった。黒く細いものが動くのが見え、胸が高鳴った。

先の膨らんだ2本の管が少しずつ上に伸び、続いて黒い頭が現れた。ほとんど同時に娘と私はカメラと携帯電話を取りに走った。「同じことを考えてる」と大笑いしながら。春の日、お昼過ぎの出来事だ。

さなぎを見つけたのは前年の晩秋だった。庭に面したガラス戸のアルミサッシ側面の高い位置に何かがついていた。近寄ると、さなぎのように見えた。蛾かそれとも蝶か、蛾だったら遠慮願いたい。取ろうとしたが、どこかで見た気がして思いとどまった。長さは約3センチ、色は黄緑で、形は細くて尖った葉っぱのようだ。



インターネットで調べると、そっくりの写真が見つかった。アゲハ蝶のさなぎだった。

それにしてもアルミサッシには、屋根の下で雨をしのぐことができ、外敵からも身を守りやすいと思ったのだろうか。

そのガラス戸は毎日何度も開け閉めする。

もう片方のガラス戸から出入りしようと試みたが、不便ですぐにいつも通りに戻ってしまった。さなぎは家族が庭に出るたびに右へ左へと移動することになったが、これは彼(彼女?)にとって想定外だったことだろう。

やがて冬が来て、早春へと季節が移り、さなぎの色も次第に変化していった。明るい緑からくすんだ緑に、そして本格的な春がやってくると濃いグレーになった。

明るい日差しが降り注ぐ庭には、夫が前年に植えたチューリップをはじめ様々な花が咲き揃い、蜜の準備がすっかり整った。それを待っていたかのように、ついに待望の羽化が始まったのだ。

「さなぎはどうなったかなと見た途端にぱっと裂けたの」と興奮気味に話す娘。出て来るスピードは意外に早く、青い模様のついた黒い羽根が見え始めた。私達はカメラと携帯で写真と動画の撮影に夢中になった。

体全体がほとんど出かかった時、私は、ふと、つかまるものが何もないのに気がついた。滑り落ちたら大変だ。テーブルの上に飾ってあった

ミリオンバンブーを花瓶ごと持ってきて近づけると、ゆっくり移ってくれた。

そーっと濡れ縁へ置くと、まだ柔らかく頼りなげな2枚の羽をびたりと合わせたまま、じっと動かない。これほど間近に蝶を眺めたのは初めてだ。くるりと巻いた吸蜜管、シックな黒い体と羽根、青色の模様が映えて、良く見るとほんの少し赤い部分もある。背景に見える新緑とカラフルなチューリップとのコントラストが見事だ。アオスジアゲハだった。

「誕生おめでとう！」我が家で生まれた赤ちゃん蝶をいつまでも見つめていたかったが、あいにく娘も私も外出する時間になり、その場を後にした。

夕方、帰宅すると、もうとっくに飛び立ったと思っていたアゲハが、なんとまだミリオンバンブーに止まったままだった。

夜になっても翌朝になってもいて、家事を何度も中断して見に行った。見るたびに羽根がしっかりしてきて、いつ飛び立つのか気になった。お昼過ぎに見に行くと、とうとう姿が見えなくなっていた。



娘は、蝶が好きな友人に羽化の様子の写真を送付しメールした。何匹も飼育しているが、まだその瞬間に出会ったことがないそうだ。

東京近郊にある我が家。時々光化学スモッグ注意報が出る日もある。そんな中、サッシについたさなぎが無事に育ち、私達がちょうど家にいた日に羽化を始め、誕生のすべてを見せてくれた。嬉しい出来事だった。

私は冬から体調を崩し、季節や周りを忘れる程ゆとりをなくしていたが、急に気持ちが明るくなり元気が湧いてきた。自然からの思いがけないプレゼントに感謝した。

数日後、「来てるよ」という夫の呼び声に庭に出ると、1匹のアオスジアゲハがガラス戸近くの花に止まっていた。あの蝶に違いないと思った。「お帰りなさい」と出迎えて、ひらひらと飛びまわる姿をずっと目で追った。

アオスジアゲハの寿命は2週間～1か月くらい。1年のうち冬はさなぎで越冬し、春から秋の間は卵から幼虫、さなぎ、成虫へのサイクルを2～4回繰り返すそうだ。

新年の計画の1つは、花をたくさん育てること。幼虫の好むクスの木もあるので、あのアゲハの子孫が近くにさなぎを作っているのではないかと期待している。蜜を用意して待っていよう。新しい楽しみができた。